

Annual Report 2020



- 03 ごあいさつ
- 04 2020年の動向と成果
- 05 日本国内のプログラム
- 10 海外のプログラム
- 13 企業・団体との協働
- 15 ご支援いただいている企業・団体
- 16 イベントの開催
- 17 事業報告・会計報告
- 20 アースウォッチについて



2019年、日本の社会は「百年に一度」といわれた台風の豪雨や強風で深刻な影響を受けました。翌2020年、私たちは台風災害は免れた代わりに、さらに深刻な新型コロナウイルスの感染拡大という災禍を経験しました。歴史的な自然災害なら翌年には起こらないだろうという予想がありましたが、淡い期待を打ち砕く展開に、勁(つよ)い心を持ち、考えられないことを考えておくことの必要性を感じております。

台風はアースウォッチ・ジャパンの活動に大きな影響を与えましたが、新型コロナウイルスの打撃はそれと比較できないほど大きく、われわれの存亡に関わる打撃を受けました。大半の調査活動やイベントが開催できず、事務局のある東大農学部キャンパスもロックダウンされ、自然保護NGOの活動自体すら問われる事態になったのです。当然の結果として事業収支が大きく減少しました。不幸中の幸いは、持続化給付金等の補助を受け損失は免れたことでした。

2021年には、コロナ禍の回復を祈りつつも、グループでの行動を伴わないプログラムやオンラインでのワークショップなどを試行し、効果的な活動方式を模索する計画です。感染拡大が続く中での厳しい状況に対応すべく、当法人運営上の効率化も考えなければなりません。

その中で、われわれに新たなビジネスモデルを考える強力な仲間が加わりました。年末の社員総会で、アースウォッチ・ジャパンの創設時から経理の面で貢献された西理事の退任の一方、2名の新理事の選任が承認されたのです。新理事は、小谷あゆみ氏(フリーアナウンサー)と長沼史宏氏(アステリア株式会社コミュニケーション本部長)で、今までに無かった視点から事業の改革と発展を図って頂けると期待しております。

皆様方におかれましても、われわれの活動に引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。また時節柄、一層のご自愛とご健勝をお祈り申し上げます。

2020年12月

浦辺 徹郎
アースウォッチ・ジャパン理事長

アースウォッチの活動は、国連のSDGs「世界を変えるための17の目標」のうち、以下の項目達成に寄与します。



2020年の動向と成果

2019年10月に始まったアースウォッチの本年度は、新型コロナウイルス感染の影響で前半と後半で様変わりしました。前半では2019年の最後の野外活動ー柳川のウナギ調査ーを実施し、横浜大学大学院松田教授による知床世界遺産登録までの経緯と試練についての講演会と冬期恒例のイベントー多摩動物園の保全活動見学と会員向け都内の古代史探訪散歩ーを2020年1月までに開催しました。2月からは感染拡大を心配しつつも、4月以降に予定していた調査活動の準備と参加者の募集を行いました。しかし、間もなく、大勢の方の応募をいただいているにもかかわらず、次々と調査を中止することになりました。

野外での活動であれば新型コロナウイルス感染リスクはないと思われることもありますが、ワクチン接種など感染予防策が確立されるまでは10人前後といえども、グループでの移動、宿泊、飲食やレクチャーのときの感染リスク、また地域外からの参加者の流入に対する現地の心配などを考慮しなければなりません。従って7月以降に、ふじのくにの里山と気仙沼舞根湾の調査を人数等の制約下で実施しましたが、大多数のプログラムは中止せざるを得ませんでした。

同様に、感染に関する懸念から東京大学の2020年度夏季「体験活動プログラム」が中止され、例年は東大生が数名調査に参加していましたが、本年は参加ができませんでした。

日本から海外各地の調査参加は2月まで8回ありましたが、3月以降は海外でも野外調査がすべて取りやめられました。2021年の現地調査日程が発表されていますが、日本からの参加再開は国内外の新型コロナウイルス感染と渡航制限の有無に左右されると予想されます。

他方で、2003年から2019年まで花王株式会社のご支援のもと、小中学校の先生方を海外調査に派遣した「花王・教員フェローシップ」活動、その17年間の軌跡と活動の成果をウェブサイトに公開しました。多様な成果が得られ、その影響が持続していることに改めて驚かされました。

さらに、新型コロナウイルス感染拡大という逆境の中でしたが、「3密」を回避できる、個人で調査する「環境DNAを用いた魚類調査」プログラムを8月に開始することができました。ボランティアは魚類調査用の海水サンプルを各自作成し研究者に送り、研究者が調査の目的、手法や成果をオンラインで伝える形式の活動で、アースウォッチがイギリスやオーストラリアで実践している、いわゆる「シチズン・サイエンス」活動です。2021年には人数をふやした本格実施を計画しています。ほかのテーマでも応用できる、シチズン・サイエンスのさらなる展開を期待しています。

また、本年度に実施できなかった「石垣島白保のサンゴ礁」や「東京湾のアマモ」調査プログラムの補完的な活動として、オンライン・ワークショップや自宅で行う研究用画像の処理を企画しています。このようなリモートワークで現場体験同様の効果があげられるか、あるいは代替手段があるのか、当面は試行と検証を続けます。

アースウォッチの運営は調査プログラムをご支援いただいている企業や団体の寄付金に依存しています。本年度はプログラム中止に伴い寄付金収入が大きく減少しました。ただし、今期は売上が大きく減少した事業者に対し支払われる持続化給付金や家賃補助、および雇用を維持しながらの一部休業実施に対する雇用調整金を受領し、損失は免れました。

事務局は2020年3月からほとんどの業務をテレワークで支障なくこなしています。追加補助金はなく、フィールドワークの新企画も導入しがたい、より厳しい状況が予想される次年度において、運営費の節減のためにもテレワークを継続し、賃貸している事務スペースを減らす予定です。思えばテレワークは感染対策がきっかけでしたが、ワークスタイルひいてはライフスタイルについて考える機会になっているような気がいたします。アースウォッチはサステナビリティ意識を皆さんとともに高めてまいりたいと考えています。

日本国内のプログラム

■実施したプログラム

ふじのくにの里山 - 植物と昆虫のつながり

チーム4: 2020年7月11日(土)
チーム5: 2020年9月20日(日)
チーム6: 2020年9月26日(土)
チーム7: 2020年10月17日(土)

静岡県の都市近郊に広がる有度(うど)丘陵で、四季を通じて植物と昆虫の関係性や多様性を調査し、都市近郊に残る自然環境の変遷を把握します。
調査を通じて都市近郊の里山生態系の一端を捉え、地域の自然を保全することの本質的な意義について考えることができます。

■中止したプログラム

東日本グリーン復興モニタリングプロジェクト 被災した地域のいきもの調査(干潟調査)

木曽馬文化と草原の再生

石垣島白保のサンゴ礁

魚のゆりかご 東京湾のアマモ

気仙沼・舞根湾に蘇る生き物たちに 学ぶモニタリング調査 震災後の海の生態調査

チーム2: 2020年7月18日(土)~19日(日)
チーム3: 2020年9月26日(土)~27日(日)

東日本大震災の津波で影響を受けた宮城県気仙沼市の舞根湾で、森と海をつなぐ沿岸域の生態系の回復の過程を調査しています。複数の研究者が連携して行う分野横断型の研究スタイルです。調査を通して、自然の多様なつながりや自然と人との関わりについて実地で学ぶことができます。

種子島のアカウミガメ保全

ボランティア参加型のプログラムは中止としましたが、研究者による限定的な調査を継続し、有効なデータを収集できました

紀州みなべのアカウミガメ

ボランティア参加型のプログラムは中止としましたが、研究者による限定的な調査を継続し、GPS付き発信機の装着を行いました。

サンゴ礁保全プロジェクト調査研究支援活動 ー 沖縄

研究者によるオンラインセミナーを実施しました。

ふじのくにの里山 ― 植物と昆虫のつながり



Supported by 公益財団法人イオン環境財団
公益財団法人松下幸之助記念志財団

調査結果

有度(うど)丘陵に所在する「ふじのくに地球環境史ミュージアム」自然観察路及び伝統農法を实践する菊川市の茶草場(ちやくさば)において、昆虫及び植物調査を行いました。

■ミュージアム自然観察路：

昆虫の任意採集や飛翔性昆虫を捉えるマレーゼトラップによる昆虫の捕獲調査を実施し、ソーティング作業等を行いました。過年度を含め、採集・標本作成された昆虫は、甲虫目、チョウ目等16目2725個体に上りました。今年ではじめて記録された外来種としてタイワンタケクマバチが、温暖化で分布を拡大していると考えられる種としてリュウキュウコオロギバチが確認されました。

■茶草場：

茶畑に敷くためのススキやネザサを採集するために維持される草地である茶草場において、昆虫相調査を実施しました。今回の調査では、9目37科89種を採集しました。このうちコウチュウ目5科9種は、茶草場から初採集でした。

考察

■ミュージアム自然観察路：

昆虫のインベントリー(種リスト作成)が国内で一番進んでいる場所は東京の都心に位置する皇居であり、そこでは多くの昆虫学者が調査に参画して2900種を越える昆虫が記録されています。皇居との比較は本調査地の特性を考える際に、参考になると考えられます。例えばナナフシ目では皇居が1種、本調査地で4種、カマキリ目ではが皇居が3種、本調査地で5種と種数を上回っており、東京都心よりも昆虫の種多様性が

高いことが示唆されています。また、今回の調査でこれまでこの地域で確認されていなかった、外来昆虫や温暖化で分布を拡大しているとみられる種が確認され、生態系の変化の一端を捉えることができたと言えるでしょう。

■茶草場：

世界農業遺産に認定されている「静岡の茶草場農法」は茶畑の周辺にススキやネザサの二次的自然草原が維持されており、そこには、草原性の希少な植物が生育しています。現在実施中の昆虫相調査については、これまで548種の昆虫を記録していますが、今回、新たにコウチュウ目5科9種を追加することができました。このことは、茶草場を生活の場とする昆虫類が今後も見出される可能性を示唆しており、伝統農法である茶草場は、茶業を行うことで副次的にその地域の生物多様性の保全に貢献していることを示しています。

茶草場で採集した昆虫類の目別内訳

目	種数
トンボ目	3
ゴキブリ目	1
バッタ目	16
カメムシ目	18
コウチュウ目	23
ハチ目	4
シリアゲムシ目	1
ハエ目	3
チョウ目	20
合計	89

調査の概要

私たちの周りは、様々な生物であふれています。目立つ鳥やきれいな花の他にも、目に見えないほど小さな虫や土の中の菌類など、深山や密林にでかけなくても、身近な自然のなかにたくさんの生物がくらしています。地域の生物多様性は、長い地史的な時間と有史以来の人と自然の関わりの中で形づくられてきました。生物多様性を理解するためには、「どんな生物がすんでいるのか」ということと、「生物たちがどのように関わりあっているのか」を知ることが重要です。

このプログラムでは、静岡市とその周辺にある里山の植物や昆虫及びそれらの関りについて調査します。

ミュージアムに隣接する里山で採集した昆虫類の目別内訳

目	個体数
イシノミ目	4
トンボ目	6
カワゲラ目	1
ナナフシ目	5
ゴキブリ目	29
カマキリ目	23
バッタ目	124
ハサミムシ目	5
アザミウマ目	3
カメムシ目	311
アミメカゲロウ目	30
コウチュウ目	1087
ハチ目	569
シリアゲムシ目	12
ハエ目	481
チョウ目	35
合計	2725

今後の見通し

昆虫類の種の多様性は膨大ですが、市民の協力により少しずつデータを蓄積することで、全貌に近づくことができるだろうと考えています。まずは、同定が可能な群からリスト化を進め、本地域の昆虫相の特性を明らかにしていく予定です。また、外来種の侵入や温暖化による分布拡大種を捉えることで、生態系の変化を継続的に見続けることができるでしょう。

一見何の変哲もないように見える都市近郊の自然のなかにも、まだよく分かっていない「もの」(生物)や「こと」(関係性)があふれているはずです。具体的には捕虫網や罠を利用して、網羅的に昆虫を捕獲し昆虫相を調べます。また、どんな植物が生えているかを調べたうえで、その花粉をどんな昆虫が運んでいるか、侵略してくる外来生物は脅威になっているかなどを調べます。

そうした調査を通じて都市近郊の里山生態系の一端を捉え、可視化することを目指しています。

【調査地】 静岡県静岡市

7月～10月 4チーム 25名

主任研究者



岸本 年郎 先生 (きしもと としお)

ふじのくに地球環境史ミュージアム 教授



早川 宗志 先生 (はやかわ ひろし)

ふじのくに地球環境史ミュージアム 准教授

参加者の声

「静岡の生物多様性の豊かさの一端に触れられたことはとても貴重なことでした。特に茶草場は生物多様性が高く貴重な環境ですが、茶草場農法を行う農家は少なく存続が苦しい状況であることを知りました。茶草場を守るためには農家の支援も大切であることなど、大変意義深い学びの機会となりました。」

「生物にこんなにも種類があり、一つ一つが美しいことが発見でした。ついやってしまいがちな人間の視点で物事を考える癖から、視野を一段広げることができる貴重な体験でした。」

「何を聞いても、スッキリと明快なお答え。地球、生物に対する理解が深まりました。図鑑などには書かれていない分類のポイントを教えてもらったことも楽しかったです。」



気仙沼・舞根湾に蘇る生き物たちに学ぶモニタリング調査 震災後の海の生態調査



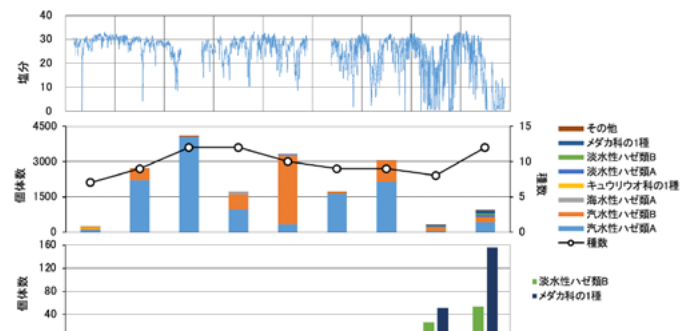
Supported by 公益財団法人自然保護助成基金第30期(2019年度) プロ・ナトゥーラ・ファンド助成

調査結果と考察

気仙沼・舞根湾および大川流域において、2011年の地震と津波から生物環境が受けた影響と回復過程を検討するため、物理(流れ・塩分・水温)、化学(水質・底質)、生物(貝類・海藻類・魚類)などの環境パラメーターを隔月で調査しています。現在、海域環境は安定していますが、震災直後からの貴重な連続データを蓄積しています。

そして、2019年3月から始まった東・西舞根川の護岸改修工事により塩性湿地を取り巻く環境が大きく変貌しました。工事を行う際には河川水をバイパスさせる必要があるため、護岸を開削して湿地を経由する導水路で接続しました。これによって、全ての淡水が湿地に流入して、塩分が一時的にゼロにまで低下し、淡水湿地と化しました。その後、工事箇所へ漏れ出てくる海水をポンプアップして湿地に排水することで、塩分が20まで上昇して汽水域環境を維持しています。

このように、人為的に塩分濃度を変化させることで、生態系にどのような影響が生じているか確認しています。湿地での小型魚類の推移を見ますと、汽水性ハゼ類の個体数・種数ともに2014年にピークとなり、その後2018年まで低下傾向にありました。淡水が導入された2019年には全個体数が激減し、その一方で淡水性のハゼやメダカ科の一種が増えました。環境要素との関連解析は今後行いますが、人為的な改変によってその場を好む魚種が加入することが分かり、湿地造成の手がかりとなるデータが得られつつあります。



調査の概要

2011年3月11日に巨大な地震と津波が舞根湾を直撃し、壊滅的な被害をもたらしました。基幹産業であるカキやホタテガイの養殖業の再開に不可欠な海の環境と生きものの様子を解明するために、宮城県気仙沼市唐桑町舞根湾で研究者集団による合同調査が2011年5月より始まりました。

これは、地震と津波が森と海をつなぐ沿岸域の生態系に及ぼした影響と、その回復過程を調査・記録し、世界に発信するとともに次世代に伝承することを目的にしています。調査を通じて、湿地や干潟の環境、その周辺の海に蘇る生き物たちや生物多様性の変化を中長期的にモニタリングし、水域と陸域の移行帯(エコトーン)の重要性を科学的に評価していきます。

【調査地】気仙沼市舞根地区の海上および河口干潟・湿地

7月・9月 2チーム 4名

今後の見通し

現在、河川護岸の工事は急ピッチで進められており、2021年3月には完了しそうです。完了後は再び水の流れが変わるため、塩性湿地の塩分、底質、ベントス、仔稚魚などがどのように変遷してゆくか、引き続きデータをとり続けます。

新たな河川護岸は生態系に配慮しており、気仙沼市と協議を重ねて、河川中流部の護岸はコンクリートフレームの中に採石を詰めて、魚や底生動物が棲めるタイプに、河口域の護岸は多孔質コンクリートで地下水が通過できるタイプにしてもらっています。このような多層的な環境配慮工事は、津波被災地では初の試みです。また、新しい環境護岸の機能も調べてゆくことで、河川汽水域と塩性湿地が一体となった環境再生の知見を得られ、他の地域での取り組みの前例になることが期待されます。

さらに今年度から、西舞根川の上流域にも展開して、密集した人口林を間伐して針広混交林に切り替える取り組みも開始しました。

これからも、森里川海がつながったまちづくりを実践してゆくと共に、ボランティアのみなさんの協力のもと調査を進めて、その意義を科学的に証明してゆきたいと考えています。

主任研究者



田中 克 先生 (たなか まさる)
京都大学名誉教授、舞根森里海研究所 所長



横山 勝英 先生 (よこやま かつひで)
東京都立大学 都市基盤環境コース 教授

他の研究者の方々(五十音順)

千葉 晋 先生	東京農業大学生物産業学部 教授
中山 耕至 先生	京都大学農学研究科 助教
夏池 真史 先生	北海道立総合研究機構 函館水産試験場研究員
益田 玲爾 先生	京都大学フィールド科学教育研究センター 准教授
山田 雄一郎 先生	北里大学海洋生命科学部 講師
山本 光夫 先生	東京大学海洋アライアンス 特任准教授



参加者の声

「森と海と里をつなぐために、現地の漁業者、NPO、様々な分野からの研究者がいろいろな方向から知恵を出し合い、一つの方向に向かって努力されてきたことがよく分かりました。ここで出会った方々はとても明るく、お互いを尊重され、つながりながら楽しく取り組んでおられ、このような姿勢がきっとこれからの未来を明るくしていくのだろーと思えました。」

「過去に参加した調査の中でも、息の長い画期的なプロジェクトだと思いました。コツコツと実績を積み上げることの重要性を痛感しました。」

海外のプログラム

アースウォッチ海外調査プログラムは、普段は訪れることのないワイルドな自然あふれる地域に、1週間から2週間程度滞在してフィールド調査に参加するものです。研究者が丁寧に指導しますので専門知識は必要ありません。

1971年のアースウォッチ設立以来、これまで1400余りのプログラムを実施。のべ100,000人以上のボランティアが、研究者を手伝いながら、地球の今を目撃してきました。

日本からは2019年10月~2020年9月の間に以下のプログラムへ6名のボランティアが参加しました。

最新の調査内容や日程はWebで「アースウォッチ 海外調査」を検索してください。

https://earthwatch.jp/pj_oversea/index.html

 WILDLIFE & ECOSYSTEMS

Conserving Wetlands and Traditional Agriculture in Mexico
メキシコの湿原と伝統的農業の保全

Mapping Biodiversity in Cuba
キューバの生物多様性マッピング調査

Conserving Endangered Rhinos in South Africa
南アフリカの絶滅危惧種であるサイの保護

Wildlife and Reforestation in Brazil
ブラジルの野生生物と森林再生

 CLIMATE CHANGE

Climate Change at the Arctic's Edge
北極圏周辺の気候変動

 OCEAN HEALTH

Costa Rican Sea Turtles
コスタリカのウミガメ

Conserving Marine Life Along Catalina's Coast
カタリナ島の沿岸に生息する海洋生物の保全



「調査そのものもそうですが、研修センターでの生活では限られた資源(特に水)を節約するようなルールがあり、この経験を日常生活に活かしていきたいと思います。」



「今回この自然溢れる環境に来てからとても毎日健康的に生活できましたし、都市にいた頃の肌トラブルもほとんど無くなりました。いかに人間が健康に生きていく上で環境が大事なのかを体感できました。」



「マイクロプラスチックの調査を通じて事態の深刻さに気づき、プラスチック製品の使用について考えるようになりました。様々な調査のどれも楽しかったですし、他の参加者の方との交流や研究者の方のお話なども楽しかったです。」



企業・団体との協働

| 花王・教員フェローシップ |

花王株式会社のご支援のもと、2003年から2019年まで実施したプログラムの集大成としてまとめのWebサイトを作成しました。

プログラム概要、プログラムの成果インタビュー、授業等での実践事例、参加の際の報告書の4部構成となっています。

帰国後の授業をきっかけに、生徒が自発的に国際理解サークルを立ち上げた、校内に環境委員会を設置した、参加教員のネットワークで相互に出前授業を実施した、環境探究学研究会を立ち上げた、など「花王・教員フェローシップ」プログラム参加の成果は17年の間に多様な形で現れています。

体験を通して環境教育に対して抱いていた見方がさらに充実し、より自信をもって子どもたちと接することができるようになったり、同僚の教員の方や保護者の方々にまで体験を話す機会を持った方も多かったようです。

さらには、この体験からご自身が環境教育をさらに研究したいとステップアップされた方々がいます。

みなさんが、「花王・教員フェローシップ」の貴重な体験を様々な形で、子どもたちや周りの方に伝えていきます。

以下から、ご覧いただけます。

<https://www.earthwatch.jp/kaofellow/>

花王・教員フェローシップ
生物多様性支援プログラム

[トップ](#) [概要](#) [成果](#) [実践事例](#) [報告書](#)

「花王・教員フェローシップ」17年間の軌跡

「花王・教員フェローシップ」プログラム参加の成果は17年の間に多様な形で現れています。

概要



花王株式会社とアースウォッチ・ジャパンは、2003年から小・中学校の先生方を海外調査プログラムへボランティアとして派遣する活動を実施してまいりました。

成果



ここでは、教員フェローとして参加された方の中から10名に登場いただき、それぞれの観点からプログラムの成果を語っていただきます。参加したフィールドでの調査から発展して、どのように現

実践事例



野外調査のフィールドで教師が体験した事例を具体的にどのように生徒達に伝えることができるのでしょうか？帰国後の体験報告や、その後のさらなる発展でクリエイティブでオリジナリティあふ

｜ 松下幸之助記念志財団
教員フェローシップ ｜

2014年度より松下幸之助記念志財団と共に、次世代を担う子どもたちの環境教育推進を目指して、子どもたちの環境教育に関わる職員を対象とした支援プログラムを行っています。2020年は、感染症の拡大により派遣を予定していたプログラムの中止や内定者の辞退がありましたが、3人の教育関係者がアースウォッチの国内調査プログラムに参加し、その体験を子どもたちに伝えました。それぞれの貴重な体験や授業の様子は、報告書としてWebに掲載されています。

https://www.earthwatch.jp/pj_domestic/assist/kmmf_report.html

プログラム	開催	参加者(地域)
震災後の海の生態調査 (宮城県気仙沼市)	9月26・27日	中学校教諭(東京都)
ふじのくにの里山―植物調査	10月17日	小学校教諭(東京都) 中・高校教諭(千葉県)



教員の体験を語ることによる生徒の学びへの影響について
(報告レポートより)

「教員自身も専門外のことは学び、知識を得ていく必要がある。その姿勢や自然を観察する視点を生徒に伝えることで、生徒は自ら観察し学ぶようになっていく。今回のチョウ類の標本づくりも比較的材料をそろえやすく、簡単に行うことができる。生徒は私がチョウを渡すと自然に標本づくりを始めていた。「他のチョウは?」「来年もできますか?」といった声も多く聞かれた。生徒が自主的に学んでいくよう誘導するために、やはり教員自身が学ぶ体験を大事にする必要があると思う。」 (中学高等学校教諭)

｜ azbil グループ 環境保全活動 ｜

協働企業:アズビル株式会社、アズビル京都株式会社
活動地域:京都府船井郡京丹波町 アズビル京都株式会社の森林
主任研究者
中島 皇:京都大学フィールド科学教育研究センター
森林生態系部門森林情報学研究室 講師

アースウォッチ・ジャパンでは、2013年からazbilグループの従業員が森林保全と活用を考え、取組むための環境保全プログラムを実施しています。自治体が造成した山林の一面に建設されたアズビル京都株式会社は、造成当初は何も生えていなかった斜面に、アカマツ・リョウブ・ソヨゴ・クリなどの樹木が育ち始めています。これらの森林(以下「アズビル京都の森」といいます)をどのように保全するかについて従業員が考える機会をつくりたいとazbilグループから要請があり、アースウォッチでは京都大学の中島先生に指導を依頼し、プログラムを進めています。従業員自らがアズビル京都の森でアカデミックな側面を持つ調査や整備をしながら、「なぜ森林は大切なのだろうか?」と自問自答しつつ、造成した斜面とその背後にある森林の今後を考え、意見を交わしています。2019年11月の活動では、2013年から定期的に行っているマツ林での調査と、獣害対策としてシカ柵の設置を1泊2日で行いました。1日目は、樹木の太さや高さを1本1本計測する毎木(まいぼく)調査を行いながらマツ林の観察を行い、夜には、過去6年間の調査データと今回のデータを比較するワークショップを行いました。参加者は、中島先生や京都大学の学生スタッフの指導により、森の移り変わりについて学び、気づきを深めました。二日目は、昨年植樹したミズナラなどの樹木を獣害から守るために、以前に設置したシカ柵を拡張しました。毎年春と秋に実施している環境保全活動ですが、2020年春の活動は感染症の拡大により中止になりました。これからも状況を見ながら、中島先生の御指導のもとに環境保全プログラムを実施していく予定です。



ご支援いただいている企業・団体



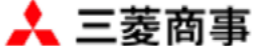












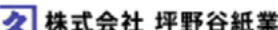











(敬称略 五十音順)

アズビル株式会社 MS&ADインシュランスグループホールディングス

株式会社カカコム カシオ計算機株式会社 花王株式会社

キリンホールディングス株式会社 清水建設株式会社 住友生命保険相互会社

住友電気工業株式会社 住友ベークライト株式会社 中部土木株式会社

株式会社坪野谷紙業 株式会社電通 日本郵船株式会社 パルシステム生活協同組合連合会

日比谷クリニック BNPパリバ・グループ 公益財団法人松下幸之助記念志財団

株式会社三井住友銀行 三菱重工業株式会社 三菱商事株式会社

イベントの開催

大人の遠足

動物園との協働企画です。野生生物保全センターの取り組みを伺い、バックヤードも見学させていただきました。

第12回 2020年1月25日(土)

「都立動物園・水族園での保全活動を知る」

公益財団法人東京動物園協会 多摩動物公園



会員特別企画

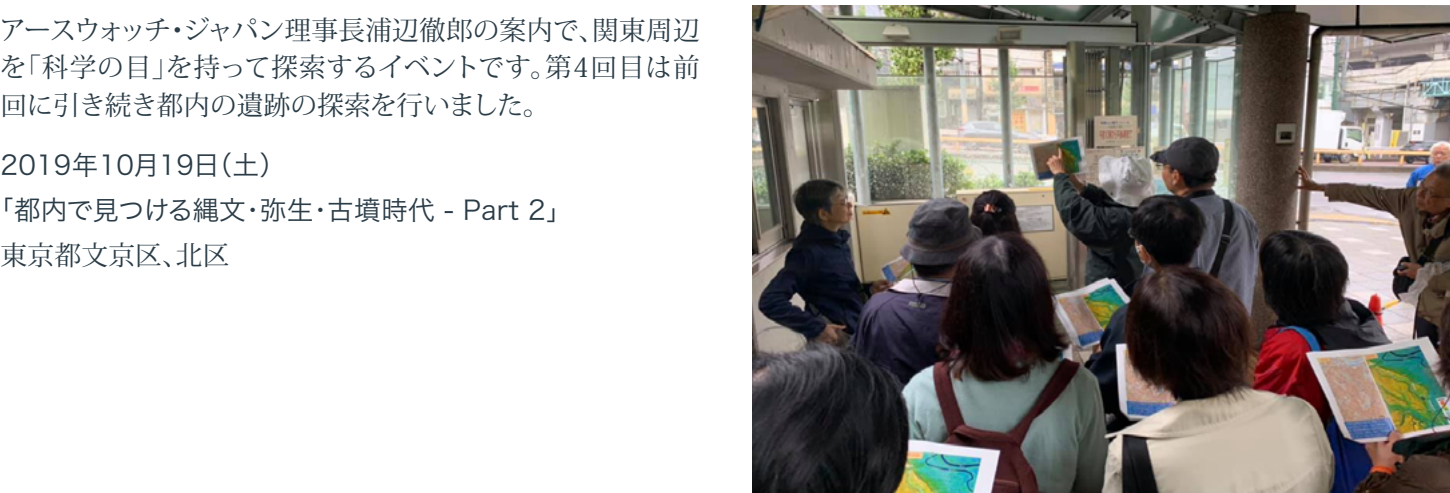
「浦辺先生と行く」シリーズ

アースウォッチ・ジャパン理事長浦辺徹郎の案内で、関東周辺を「科学の目」を持って探索するイベントです。第4回目は前回に引き続き都内の遺跡の探索を行いました。

2019年10月19日(土)

「都内で見つける縄文・弥生・古墳時代 - Part 2」

東京都文京区、北区



スペシャルトーク

日本で初めて、海域を含む世界自然遺産に登録された知床。登録実現の陰にあった、漁業者の取り組みなど、登録までの経緯と試練についてお話いただきました。

2019年12月7日(土)

「海の恵みと人の営み - 知床世界遺産の試練」

講師： 横浜国立大学大学院環境情報研究院
自然環境と情報部門 教授 松田 裕之
東京大学弥生キャンパス フードサイエンス棟講義室



事業報告

令和元年度 事業報告書

令和元年10月1日から令和2年9月30日まで

1. 事業の成果

アースウォッチの主要な活動である野外調査は、全世界に新型コロナウイルス感染が拡大したため、海外では4月以降の調査からすべて中止され、日本でも限定的にしか実施できませんでした。 その結果、事業収支は大きく減りましたが、本年度は各種給付金等を運営費に充当でき、損失は抑えられました。

これからも3密を避ける必要が継続するため、調査活動はフィールドワークの要素を残しながらも、集まっての行動を避ける方式に切り替えていかなければなりません。8月に始動した「環境DNAを用いた魚類調査プロジェクト」では各自が個別に集めたサンプルの分析を研究者が行い、指導や結果のフィードバックをオンラインで行っています。

調査プログラムが実施できず、当面は研究者によるオンラインセミナーやワークショップに切り替えたものもあります。このような活動では、いかに個人の作業と研究者との画面上でのインタラクションを通して現場体験の感動に近い効果を出せるかが課題です。

事務局は在宅勤務を基本に、有志の力も借りながら、業務を行っており、厳しい運営環境に備えて一層の効率化を進めています。

2. 事業の実施に関する事項

事業名	内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)
国内調査支援事業	国内で行われる野外調査活動の支援およびボランティアの派遣 ・柳川のニホンウナギ ・気仙沼舞根湾の調査 ・ふじのくにの里山 ・環境DNAを用いた魚類調査 ・東北グリーン復興 ・サンゴ礁保全ー沖縄 ・東京湾のアマモ ・種子島のアカウミガメ保全 ・紀州みなべのアカウミガメ ・石垣島白保のサンゴ礁 ・木曾馬文化と草原の再生 ・梶子ヴィンヤード 内フェローシップ	11月 7月、9月 7月から10月 8月から 中止 中止 中止 中止 中止 中止 中止 中止 通年植物栽培	福岡 宮城 静岡 全国 東北 沖縄 千葉 種子島 和歌山 石垣島 長野 自宅 上記	4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人	本法人の趣旨に賛同する一般市民 5人 4人 25人 80人 ー ー ー ー ー ー 9人 3人	16,660
海外調査支援事業	海外の野外調査活動へのボランティア派遣 ・一般個人派遣 ・フェローシップまとめ作成	10月から3月 一年間	全世界 東京	4人 4人	本法人の趣旨に賛同する一般市民 8人 200人	4,742
普及・啓発事業等	丹波の森の調査を通じた、社員の環境教育の実施 支援する調査研究活動の促進とボランティア活動への参加の促進 ・会員特別企画 地層探訪・古代史探訪 ・スペシャルトーク ・大人の遠足(動物園との共同企画) ・ミニトーク 野外調査研究の成果などに関する情報の提供 ・活動報告書等の配布 ・ウェブサイトの更新 ・メールマガジン配信	中止 10月 12月 1月 中止 通年 通年 年14回	京都 東京 東京 東京 東京 全国 全国 全国	4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人 4人	本法人の趣旨に賛同する一般市民 ー 11人 46人 28人 ー 1,000人 30,000人 35,000人	4,417

令和元年10月1日から令和2年9月30日まで			
科 目	金 額		
I 経常収益			
1 受取会費			
個人正会員受取会費	1,146,000		
法人正会員受取会費	1,900,000	3,046,000	
2 受取寄付金			
国内事業受取寄付金	11,694,970		
個人受取寄付金	949,000		
団体受取寄付金	605,400		
難波基金受取寄付金	0		
普及・啓発事業等寄付金	1,807,000	15,056,370	
3 受取助成金			
受取国・地方公共団体助成金	0		
受取民間助成金	3,832,414	3,832,414	
4 事業収益			
国内調査研究事業収益	47,000		
海外調査研究事業収益	2,597,200		
普及・啓発事業等事業収益	0		
その他事業収益	0	2,644,200	
5 その他収益			
受取利息	147		
雑収益	4,135,237	4,135,384	
経常収益計			28,714,368
II 経常費用			
1 事業費			
(1)人件費			
給与手当	8,924,002		
法定福利費ほか	1,952,251		
人件費計	10,876,253		
(2)その他経費			
調査研究費用	9,970,159		
諸謝金	60,000		
業務委託費	455,089		
通信運搬費	426,837		
印刷製本費	271,808		
旅費交通費	478,593		
事務用品・消耗品費	616,327		
地代家賃	2,139,894		
雑 費	525,880		
その他経費計	14,944,596		
事業費計		25,820,849	
2 管理費			
(1)人件費			
給与手当	1,115,998		
法定福利費ほか	244,141		
人件費計	1,360,139		
(2) その他の経費			
通信運搬費	52,311		
旅費交通費	4,227		
事務用品・消耗品費	109,739		
業務委託費	56,911		
地代家賃	267,606		
雑費	63,648		
その他経費計	554,442		
管理費計		1,914,581	
経常費用計			27,735,430
当期経常増減額			978,938
当期正味財産増減額			978,938
前期繰越正味財産額			19,937,070
次期繰越正味財産額			20,916,008

令和2年9月30日現在			
科 目	金 額		
I 資産の部			円
1 流動資産			
現金及び預貯金	20,076,097		
未収金	1,187,384		
前払金	689,817		
流動資産合計		21,953,298	
2 固定資産			
固定資産合計		0	
資産合計			21,953,298
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	80,000		
預り金	7,290		
仮受金	950,000		
流動負債合計		1,037,290	
2 固定負債			
固定負債合計		0	
負債合計			1,037,290
III 正味財産の部			20,916,008
前期繰越財産		19,937,070	
当期正味財産増減額		978,938	
正味財産合計			20,916,008
負債及び正味財産合計			21,953,298

監 査 報 告 書

特定非営利活動法人アースウォッチ・ジャパンの令和元年度事業報告書、令和元年度貸借対照表、令和元年度財産目録および令和元年度活動計算書を監査した結果、事業内容は妥当であり、会計書類は適正に作成されておりますことをご報告いたします。

特定非営利活動法人
アースウォッチ・ジャパン
理事長 浦辺 徹郎 殿

令和2年 11 月 4 日

監事 小津 博司

監事 塚本 雅美

アースウォッチについて

アースウォッチとは

かけがえない地球。かつてないスピードで悪化を続ける地球環境。その生物多様性への的確な解決策を探るためには科学的知見が欠かせません。世界各地の海で、熱帯雨林で、草原で、数多くの研究者が長く、そして地道な調査に取り組んでいます。

アースウォッチは、このようなフィールドと一般市民をつなぐことによって、自然環境や生物の変化に対する認識や理解を深め、持続可能な環境を維持するための行動に結びつけます。

1971年アメリカ・ボストンで設立された国際環境NGOアースウォッチには、誕生以来、世界中で情熱的なアースウォッチ・ファンが生まれ続けています。その最大の理由は、特別な技術を持たない一般市民が自発的に野外調査に参加し、一流の科学者の手ほどきを受けながら作業を行い、「地球のいま」を体験できるという点にあるのでしょう。アースウォッチは、最前線の科学(野外調査)の現場と一般市民をつなぐ、世界最大の組織なのです。

アースウォッチ・ジャパン

アースウォッチ・ジャパンは、このミッションと活動を日本に広めるために、1993年にアメリカ、イギリス、オーストラリアに次ぐ4番目の拠点として発足しました。日本における独自のニーズや現状に沿って国内の研究者とともにプログラムを開発、最も効果的な方法で日本の科学者の野外調査を支援し、その調査へボランティアを動員すると共に、海外プログラムへのボランティア派遣も行っています。

会員数 (2020年10月現在)
個人会員：252名 / 法人会員：20社

| 運営組織 | (2021年1月)

役員構成

理事長

浦辺 徹郎：東京大学 名誉教授

副理事長

石田 秀輝：東北大学 名誉教授
(合)地球村研究室 代表社員

理事

小谷 あゆみ：フリーアナウンサー 農業ジャーナリスト

後藤 敏彦：サステナビリティ日本フォーラム 代表理事

後藤 尚雄：朝日新聞社 顧問

竹本 徳子：Miller Takemoto & Partners シニアパートナー

長沼 史宏：アステリア株式会社コミュニケーション本部長
ブロックチェーン推進協会 事務局長

布井 知子：アースウォッチ・ジャパン 事務局長

藤田 香：日経BP社 日経ESG編集 シニアエディター 兼
日経ESG経営フォーラム プロデューサー

松田 裕之：横浜国立大学大学院 教授

安田 重雄：アースウォッチ・ジャパン 前事務局長

監事

小津 博司：弁護士

塚本 雅美：アースウォッチ・ジャパン正会員

プログラム検討委員会

(サイエンス アドバイザリー コミッティー)

アースウォッチのミッションに沿って、既存・新規プログラムを検討するための組織です。理事会の諮問機関として広く環境に関わる有識者の先生方から、今後のプログラム開発やその運営に関して助言を頂きます。

議長

石田 秀輝：東北大学 名誉教授

メンバー

丹治 富美子：詩人、作家

中静 透：国立研究開発法人森林研究・整備機構理事長、
森林総合研究所所長

田中 克：京都大学 名誉教授、NPO法人森は海の恋人 理事

八木 信行：東京大学大学院農学生命科学研究科 教授

Mission Statement

To engage people worldwide in scientific field research and education to promote the understanding and action necessary for a sustainable environment.

アースウォッチは野外における研究者の科学的な調査や教育と市民をつなぎ
参加した市民が自然環境や生物の変化に対する認識や理解を深め
持続可能な環境のために行動することを促進します。

認定特定非営利活動法人 アースウォッチ・ジャパン

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科

フードサイエンス棟 4階

TEL: 03-6686-0300 FAX: 03-6686-0477

info@earthwatch.jp

<https://www.earthwatch.jp>